看護から地域へ 真心を込めて 患者さんと向き合い 共に歩む

浦野シマ氏は、1913年東京府北多摩群多摩村〈現東京都府中市〉生まれ。姉兄弟が多かったが、病などで亡くし、看護の果てに嘆き悲しむ親の姿を見て子供心に世の無情を感じ、せめて両親は責任を持って見届けたいと堅く心に誓う。そして、1933年に東京府立松沢病院看護師養成所入学、看護の道に入る。

その後、看護婦養成課程の3年間を無事に終え、1936年、都立松沢病院に就職。しかし、まもなくして第二次世界大戦の困難時期を迎え、東京空襲が噂されると、空襲の心配や親の強い希望で、病院を辞めて親元に帰っていく看護師が続出し、職員不足で日増しに勤務状況の厳しい日々を過ごす。毎日の生活物資の不足はもちろん、とくに食料不足は著しかった。さらに、松沢病院は精神科の病院のため、障がいのある患者さんが多く、周囲から偏見を受けるなど辛い状況にも置かれた。それでも「我々以外にこの患者さんを誰が守るのか」と体を酷使しながら看護を続けた。大戦末期には、患者さんと共に病院で死ぬ覚悟を固める程であった。

以来77年間、精神科看護一筋に生き、自らの看護活動を含め、看護師の教育にも携わり、看護活動の管理運営に大きな足跡を残してきた。

浦野氏に指導を受けた看護師の数は計り知れず、その功績は今なお大勢の元部下に慕われ囲まれていることによっても実証されている。しかし、浦野氏が慕われる理由、それはただ「指導を受けた」というだけでなく、その指導方針にある。「何のために看護をするのか」、「なぜ精神科看護が必要であるか」を明確に、「患者さんを大切に思う心」を熱く教え続けた。

その後、1986年、「わかまつ共同作業所」を設立。病院を退院後にすぐに働いて自立が困難な方の生活環境づくりを支援している。「看護から地域へ」と人の輪を広げ、地域との関わりを持たせた。私財を投じて公的な社会福祉法人となり、通所授産施設・ギャロップの開設、運営も行う。

96歳の今もなお、毎日、作業療法などの作業を精神障がいの患者さんと一緒に行い、講話や指導を行いながら自立支援と社会復帰に貢献している。

■わかまつ後援会第5回総会

■1992年7月31日第1回若月賞を授与される浦野氏

浦野（うらの） シマ（しま） 福祉法人若松福祉会 名誉会長

1936年看護免許取得し、都立松沢病院に就職。1948年看護師長に就任。戦前から1970年にかけての看護師としての数々の活動で、日本の精神科看護の基礎を築く。看護師を勇退後、自宅を開放して精神障がいの患者さんを支援する福祉施設「わかまつ作業所」を開設。以後2施設を開設し、現在、同法人の名誉会長として活躍中。『東京都立松沢病院100年史』（牧野出版）他著書多数。

推薦者
清水 嘉与子 財団法人日本訪問看護振興財団 理事長
岡崎 祐士 東京都立松沢病院 院長